



平成30年度 日本海マアジ長期漁況予報

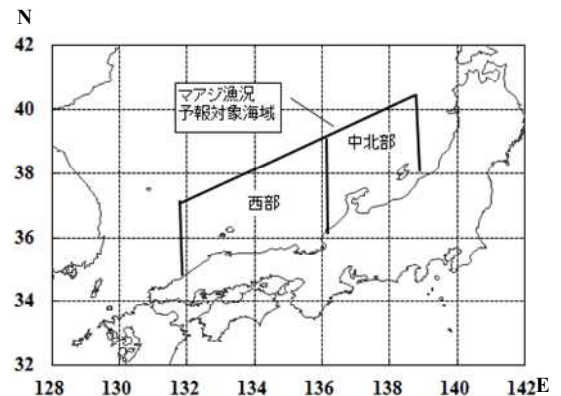
－ 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
日本海区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(平成30年5月～9月)のポイント

- ・ 日本海(西部および中北部)の来遊量は前年並
0歳魚は前年並から下回る
1歳魚は前年並
2歳魚は前年を上回る

西部(島根県～福井県)
中北部(石川県～新潟県)

※「前年」は平成29年5月～9月



問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 日本海区水産研究所
担当：業務推進部 加藤、後藤
資源管理部 森、松倉
電話：025-228-0451、ファックス：025-224-0950
当資料のホームページ掲載先URL
<http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease/>

平成30年度 日本海マアジ長期漁況予報

今後の見通し（2018年5月～9月）

対象海域：日本海（西部：島根県～福井県、中北部：石川県～新潟県）

対象漁業：まき網、定置網

対象魚群：0歳魚（2018年級群）、1歳魚（2017年級群）、2歳魚（2016年級群）

- ・日本海（西部および中北部）の来遊量は前年並
0歳魚（2018年級群）：前年並から下回る
1歳魚（2017年級群）：前年並
2歳魚（2016年級群）：前年を上回る
- ・西部および中北部ともに1歳魚が主体で、夏以降に0歳魚の割合が増加

※「前年」は2017年5月～9月を示す。

I 資源状態、漁況の経過（2017年4月～2018年3月）および海洋環境について

1. 資源状態

東シナ海・日本海に生息するマアジ対馬暖流系群の資源量は、1970年代後半に低位水準であったが、1980年代・1990年代前半に増加し、1993年～1998年には50万トンを超えた。その後、資源量は減少し、1999年～2002年には30万～40万トンだったが、2003年、2004年には増加し、再び50万トンを超えた。2005年以降は40万トン前後で推移している。

日本海で漁獲されるマアジは対馬暖流系群の一部であり、その動向は同系群の資源状態と密接に関わっている。日本海における資源の主体は、春季以降に東シナ海から九州西・北部、さらに日本海西部において産卵・ふ化し、0歳魚として対馬暖流に沿って能登半島以北に分布を広げる。越年して1歳魚になると、春季に九州西・北部から日本海西部で漁場を形成し、その後中北部に分布を広げる。その後は地付き群として中北部で漁場を形成する他、東シナ海に移動して漁獲される群もいると考えられる。

2. 漁況の経過

2017年度（2017年4月～2018年3月）における島根県～新潟県の主要港における水揚げ量は22千トン（各府県の速報値等を集計）であり、2016年度（2016年4月～2017年3月、32千トン）を下回り、近年平均（2012年度～2016年度、35千トン）を下回った（図1）。相対的に水揚げ量の多い鳥取県の減少が大きく影響した。各県では、2016年度を上回ったのは島根県および

富山県のみで、他の府県は 2016 年度を下回った。近年平均を上回ったのは島根県のみで、他の府県ではいずれも下回った。

日本海のマアジは主にまき網と定置網によって漁獲されている。しかし、定置網の占める割合は概ね 20%以下で、まき網の漁獲量の多寡が全漁獲量に大きく影響している（図 2）。2017 年度におけるまき網の漁獲量（17 千トン）は 2016 年度（26 千トン）を 8 千トン以上下回り、近年平均（29 千トン）を 11 千トン以上下回った。各月で比較すると、5 月、6 月および 2 月以外は 2016 年度と同程度か下回った（図 3）。一方、定置網の 2017 年度における漁獲量（5 千トン）は 2016 年度（6 千トン）および近年平均（6 千トン）をそれぞれ 1 千トン下回った。各月で比較すると、4 月～6 月で 2016 年度を下回り、7 月以降は同程度であった（図 3）。

2017 年度の西部の漁獲量（主にまき網）は、主に 5 月、6 月および 2 月に 2016 年度および近年平均を上回ったが、9 月～11 月および 3 月に大きく下回った（図 4）。中北部の漁獲量（主に定置網）は、4 月、5 月および 3 月に 2016 年度を下回り、その他の月は同程度であった（図 4）。近年平均と比較すると 5 月、2 月および 3 月で下回り、6 月で上回ったが、その他の月は同程度であった。以上の様に、マアジの漁況は特にまき網中心の西部で 2016 年度を下回った。

3. 海洋環境

日本海のマアジの来遊量は、中長期的に対馬暖流域の水温変動と正の対応関係が見られる。期間中 6 月までの対馬暖流域の 50m 深水温は平年並で経過すると予想されており（平成 30 年度第 1 回日本海海況予報、日本海区水産研究所）、海洋環境から受けるマアジ漁況への影響は少ないと考えられる。

II 今後の見通しについて

1. 0 歳魚（2018 年級群）

例年では、今後の日本海西部における漁獲の主体は 1 歳魚（2017 年級群）で、初夏以降 0 歳魚（2018 年級群）の割合が増加する。東シナ海における着底稚魚の分布量（0 歳魚の資源量指標値の一つとなっている）と高い相関が見られる 4 月半ばの好適水温帯面積*は、2017 年と 2018 年（予測値）を比較すると 2018 年がやや下回った（平成 29 年度第 2 回対馬暖流系マアジ・さば類・いわし類長期漁海況予報、西海区水産研究所）。このことから、0 歳魚は前年並から下回る豊度と考えられるため、来遊量は前年並から下回ると推測される。

*好適水温帯面積：東シナ海の着底稚魚調査結果の解析に基づく計算海域における表層水温 18

～22℃の面積

2. 1歳魚（2017年級群）および2歳魚（2016年級群）

2017年5月～7月に日本海西部で実施した表中層トロール調査によるマアジ稚魚の採集数と水温分布から加入量指数を算出した（図5）。今年度1歳になる2017年級群の加入量指数は過去最高であった2014年級群に次ぐ値であり2016年級群の値をやや上回ったことから（平成29年度日本海さば類・マアジ・マイワシ・ブリ長期漁況予報、日本海区水産研究所）、2017年級群は2016年級群並の豊度と考えられ、1歳魚の来遊量は前年並と推察された。今年度2歳になる2016年級群は、2017年の資源評価結果において前年の2歳魚（2015年級群）より資源量が多いと推定されることから来遊量は前年を上回ると推察される。

3. 今期の来遊量

以上から、日本海西部・中北部海域のマアジ来遊量は、0歳魚（2018年級群）は前年並から下回る、1歳魚（2017年級群）は前年並、2歳魚（2016年級群）は前年を上回ると予測される。全体として前年並と予測される。

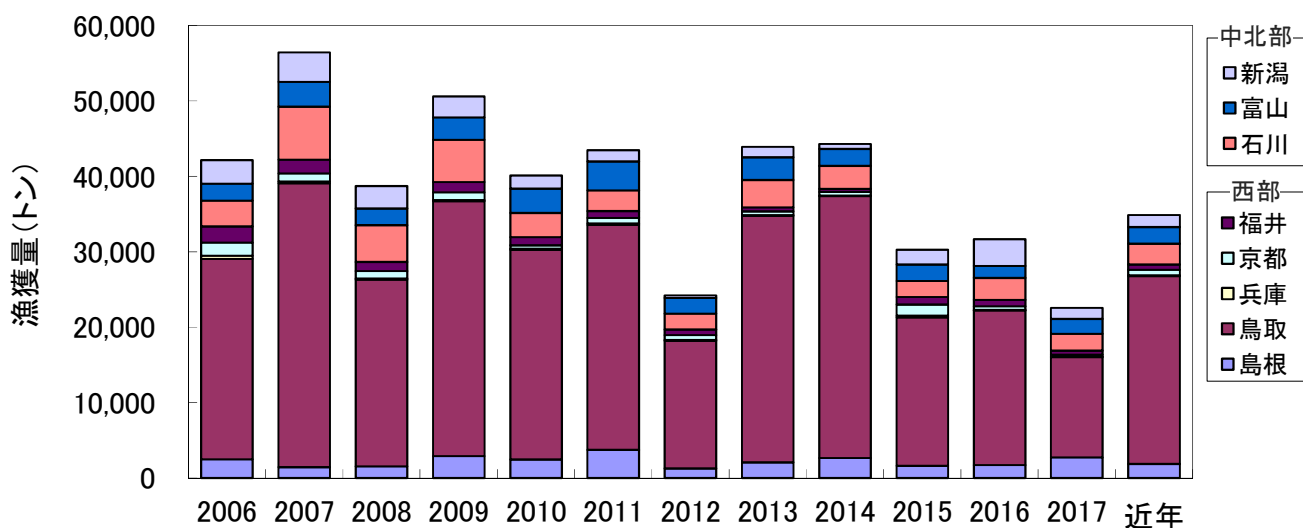


図1 日本海主要港（鳥根県～新潟県）の水揚げ量の推移（漁期年度の4月～翌年3月）
近年は2012年度～2016年度の平均値を示す

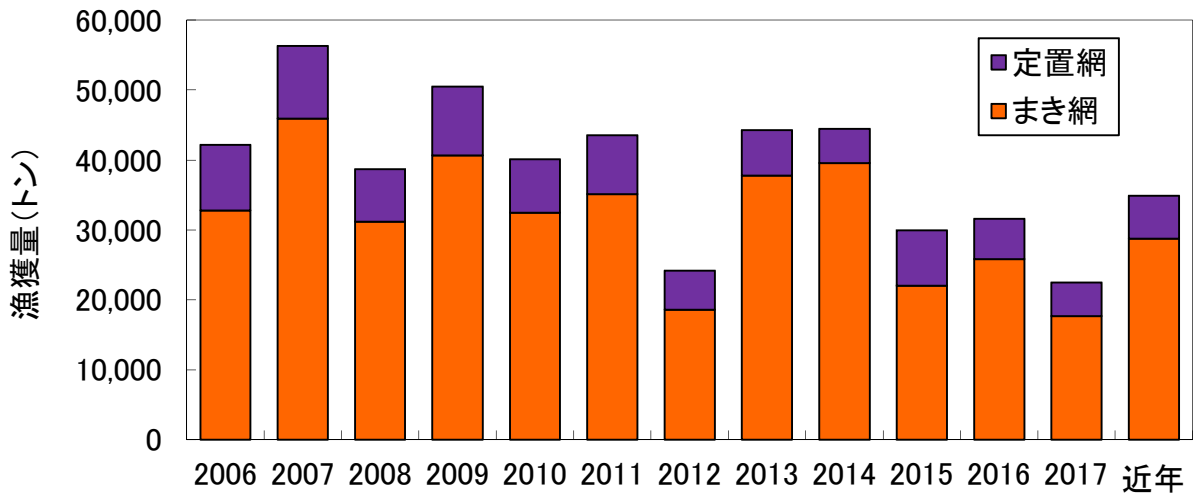


図2 漁業種類別漁獲量の経年変化（漁期年度は4月～翌年3月）
近年は2012年度～2016年度の平均値を示す

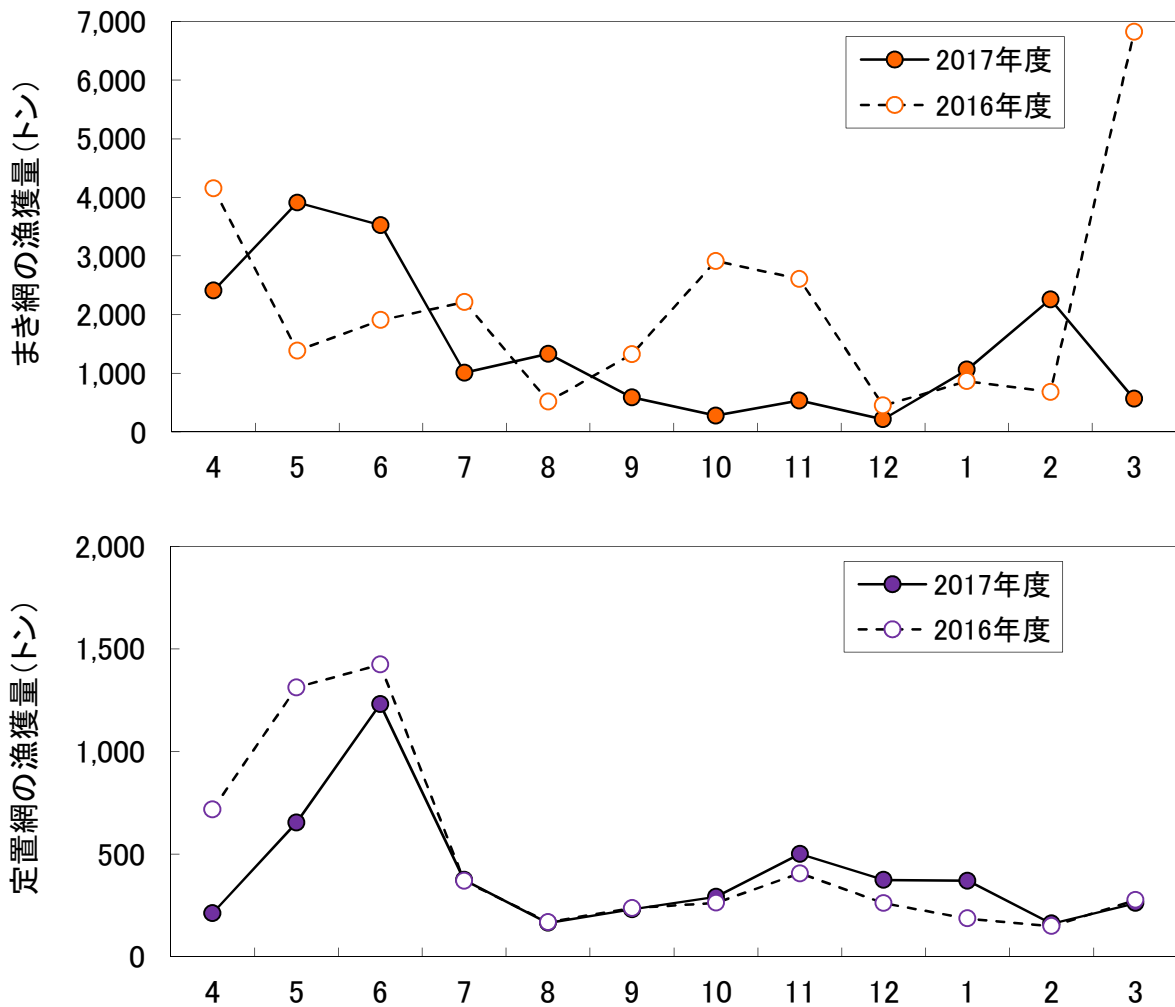


図3 漁業種類別漁獲量の経月変化（漁期年度は4月～翌年3月）
上図はまき網、下図は定置網を示す

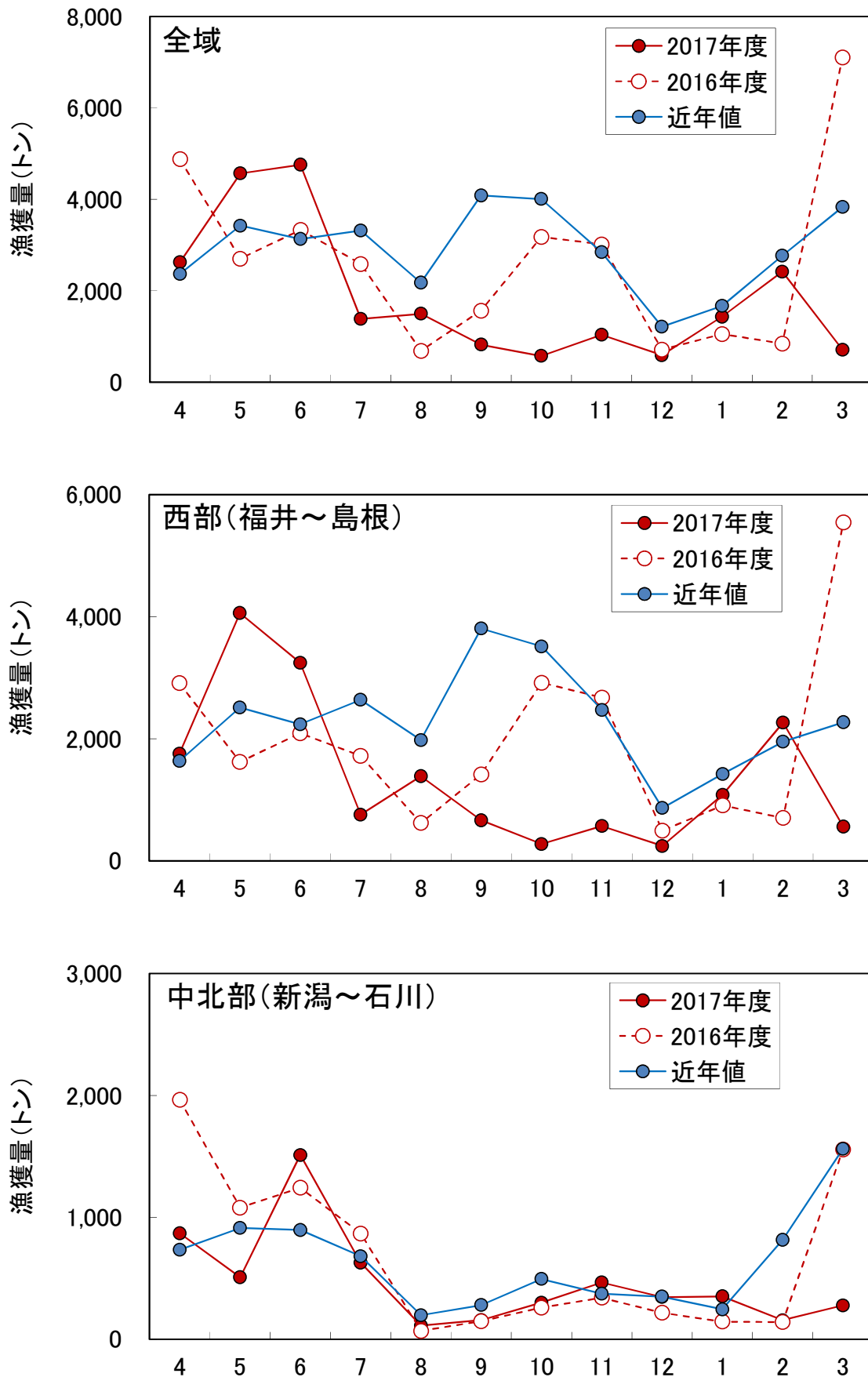


図4 海域別日本海主要港への水揚げの経月変化
近年値は2012年度~2016年度の平均値を示す

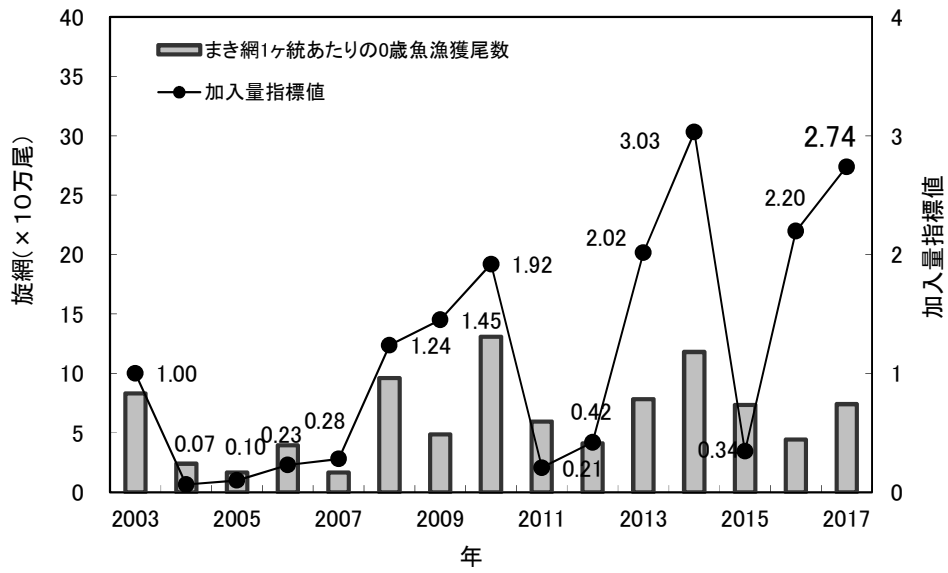


図5 日本海西部海域におけるマアジ加入量指数（2003年を1とした）と境港のまき網1ヶ統あたりの0歳魚漁獲尾数の経年変化

参 画 機 関

地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	京都府農林水産技術センター 海洋センター
秋田県水産振興センター	兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター
山形県水産試験場	鳥取県水産試験場
新潟県水産海洋研究所	島根県水産技術センター
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
石川県水産総合センター	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 西海区水産研究所
福井県水産試験場	(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 日本海区水産研究所